

「物性研究」終刊に寄せて

米沢 富美子

今回、「物性研究」が終刊になるにあたって、過去に編集などの形でかかわった人たちに執筆の依頼が出された。その昔、編集のお手伝いをした私のところにも話が来た。

思い起こせば「物性研究」とは、その前身の「物性論研究 2 集」も含めて長い付き合いになる。「物性論研究 2 集」の最終号は、Vol.13, No.1 として 1963 年の 1 月に発行された。その号に、私の修士論文が厚かましくも延々 37 ページに亘って掲載されている。その後の私の研究テーマにつながる仕事の第一論文で、この論文の内容はすぐに英文にして「Progress of Theoretical Physics」に投稿し採択された。英論文のほうは世界の不規則系研究者たちによって、しばらく引用されたりもした。

「物性論研究 2 集」は孔版印刷だった。蠟を敷いた紙に鉄筆で文字を刻んでゲラを作り、そこにインクを流し込んで印刷する。鉄筆でゲラを刻む作業が、職業として成り立っていた。したがって、自分の論文が「活字になる」という世界ではなかったが、「印刷物になる」という意味ではうれしいことだった。私の論文が「物性論研究 第 2 集」に掲載されたとき、私は修士 2 年だったので、この雑誌をめぐる経緯を把握していなかった。だから、「私の論文が載った号で雑誌が終わりになった」という事象だけが頭にあって、密かに責任を感じていた。今回、長岡洋介先生の手稿を読んで、私の論文が廃刊の原因ではなかったこと（当然ではあるが）を知り休心した。

「物性論研究 2 集」廃刊後に「物性研究」が創刊されたのだが、新しい雑誌の構想を述べた長岡先生の手稿のなかで、「雑誌は活字印刷にする」という部分が輝いてみえた。

＊

創刊から半世紀近く、「物性研究」は重要な役割を立派に果たしてきた。最初の日論見どおり、若い人たちが研究として未完成のままの論文を投稿して議論の土俵に乗せたり、研究体制に関する意見を交換したり、他の雑誌では決してできないことを実現してきた。私も大学で学生たちを指導する立場になってからは、修士課程の院生たちに、「修士論文は『物性研究』に投稿して恥ずかしくないものを書くように」と申しわたした。実際、私の弟子たちの修士論文はかなりのたくさん「物性研究」に掲載してもらった。

しかし、そういう話はずっとあとのことで、実は 1963 年の「物性研究」創刊の数年後には、私は編集長代理としてこの雑誌の編集に主体的にかかわっていた。私は博士課程終了後、学振の奨励研究員を半年勤め、1966 年 8 月からは 1970 年 8 月までの 4 年あまり、京大基礎物理学研究所（基研）の助手として在籍した。

当時、「物性研究」の編集長は基研教授の松田博嗣先生で、副編集長は助教授の武野正三先生だった。助手の私はただの下働きだったのだが、松田先生も武野先生も心優しい

人たちで、下働きのはずの私が、実質的に「物性研究」を「乗っ取った」形になっても、ニコニコしながら見守ってくださった。

私が基研に在籍し、したがって「物性研究」の編集を手がけた時期は、世界同時多発的な学生運動が起こった時期とちょうど重なる。1966年にフランスのストラスブール大学で民主化を求める学生運動が始まり、その動きはたちまちフランス全土に広がって、1968年5月には「五月革命」がパリで起こった。

この運動は時を置かずに世界中に伝搬し、古い価値観に対する若者の抗議が日本でもいわゆる大学闘争という形で現れた。そういう流れを背景に、研究体制や研究者の姿勢を問う文章が「物性研究」にも投稿された。編集の実権を握っていた私は、そういう文章を積極的に採用し、更には執筆の依頼さえもした。この時期の「物性研究」を見ていただければ、「何のための研究か」という類の論文がいくつも掲載されている。

そして遂に1969年12月には、3年後輩の蔵本由紀さんをそそのかして、連名で基研の研究会提案を「物性研究」Vol.13, No.3に載せた。

「(仮題)我々は物性物理学の将来を如何に構築していくべきか(若手による研究会開催提案)」という仰天するようなタイトルで、研究者の姿勢を問い、研究はどうあるべきかを考えようと呼びかけている。「ブラウン運動論と量子力学」と題する論文などと並んで掲載されたわれわれの論文は、志を同じくする人たちからは「米沢・蔵本論文」として一応の評価を得たが、研究会提案は基研の運営委員会で一笑に付された。

若気の至りだったと思う。問題なのは、問うた内容ではなく、問うた相手である。問いかけた内容はそれなりに的を射ていたと、今でも考えている。問いかける相手を間違えた。高飛車に他人に問うべきことではなく、まず己に問うべきことだった。

それからの40余年、堂々巡りで答えは出なかったが、問い続けつつ研究を進められるのを、幸運だと思える日々であった。そういう機会を与えてくれた「物性研究」には、ひたすら感謝の一言だ。

福島原発事故の翌年に「物性研究」が終刊になるのは、残念だ。今もし私が編集長なら、「福島原発事故を物理学者の立場で考えよう」といった特集を組むだろう。最終号に山田耕作さんたちの力作が掲載されるのは、ほんとうによかった。この問題の議論は、物理学会誌では早々と打ち切られてしまった。

冊子としての「物性研究」は本号で終わりになるが、本年4月からは「物性研究・電子版」が始まる。Webで、誰もが無料で読めるようになるという。「物性論研究」時代の孔版印刷から、「物性研究」時代の活字印刷、そしてコンピュータによる印刷を経て、いま情報伝達の手段は電子化される。

科学技術の進歩によって、情報はより多くの人たちに共有されるようになった。「物性研究・電子版」は、研究そのものだけでなく、周辺のさまざまな問題を論ずるために、従来の「物性研究」にかわる新しい「場」となるだろう。これまで以上に活発な議論が繰り広げられることを、心から願っている。